

Title	松倉乾二著 最近印度経済事情
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.11 (1918. 11) ,p.1632(146)- 1633(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19181101-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

松倉乾二著『最近印度經濟事情』

大正七年九月 東京堂發行
菊版本文二百十四頁、附録百五頁
紀念論文二十五頁

印度は戦前に於て我國に對する棉花の最大供給地であつたが、此棉花の取引以外には日印兩國間の貿易は甚だ振はなかつた。殊に印度に對する我國の輸出に於て然りであつた。歐洲戰亂勃發以來は歐洲諸國の對印輸出が困難となつた爲めに、同國に於ける我商品の販路は自然大に擴張せられた。而かも尙ほ我輸出額は日本が歐洲諸國に比し地理的に優越せる位置に在る割合には僅少である。是れ我國の工業が未だ幼稚なるにも基くに相違ないが、一には我實業家が印度内地の狀態殊に經濟事情に對する知識を缺ける結果として三億の人口を有する此大國をば重要な一市場として開拓するを怠つたことに基因して居ると思はれる。松倉氏の著述は實に此缺陷を補ひ我商工業者に印度經濟事情の一斑を紹介し、日印貿易の發達を刺戟するの目的を以て起稿されたものである。本書の本文は五章に分ち、印度の經濟地理、村落制度、英政府の施設、金融、印度人の嗜好

食料品及雜貨等の消費量、生産業の概觀等に就き平易簡明に叙説して居る。此本文以外に附録として印度に於ける數種の重要商品並に日印貿易の實狀に關して著者が農商務省に送りし報告十數篇と著者が近親友人等に宛て印度より送りし私信數通の拔萃とを載せてあるが、此等の通信は印度人の生活、風俗在印邦人の狀態等に對する有益にして且つ興味津津たるを覺えしむる著者の側面觀に満ちて居る、更に卷尾には前カルカッタ總領事なる信夫淳平氏の『印度の現況に就きて』、管船局長若宮貞夫氏の『對印交通貿易の狀況』並に帝國大學教授河津暹博士の『日印貿易の發展に付いて』と題する三小篇を記念論文として收めてある。

著者松倉乾二氏は名門の由にて明治二十三年東京市に生れ慶應義塾幼稚舎正則中學校を経て大正三年立教大學商科を卒業、翌四年の秋農商務省海外實業練習生に採用せられ印度カルフカッタに派遣されたが、監督官指定の商品に就き研究を怠らず、時々本省に有益なる報告書を提出する傍ら内地を歴遊して印度の風俗人情等を視察せしが、孟買に滞在中不幸二豎の冒す所となりて本年一月下旬白玉樓中の人となつた。享年僅に二十七、惜みても尙ほ餘りありと謂ふ可きである。本書の本文は實に氏の印度に於ける此多忙なる且つ短き生涯中に起稿されたものであつて、著者の勢力の絶倫なること吾人の嘆賞を禁ずる能はざる所である。著者最初の計畫は本書の本文に載せたる事項以外に印度の財政、爲替、富の分配、事業の收益等に就き

て論述する豫定なりしも、無情なる天は此英才をして素志を貫徹するの機會を與へざりしは遺憾の極と云はざるを得ない。

最後に吾人の一言するを禁ずる能はざるは松倉氏の遺稿が整理編輯せられ立派なる一著述として上梓せらるゝに至つたのは氏の義兄花岡博士の努力に基くの一事である。同博士は此外に本書の姉妹篇として『日印貿易之犠牲者青年松倉乾二』と題する書物を編纂發表せられて居る。此書物には松倉君の小傳、印度人の生活、風俗、人情、宗教、政治等に關する君の隨筆、並に故人に對する友人知己の感想及び故人又は故人の職務に因みて執筆されし諸名士の論文數篇を收めてある。『最近印度經濟事情』を實とせば、『青年松倉乾二』は花とも謂ふ可きか。松倉君が實業練習生として印度に赴きしは他日獨立に日印貿易に従事し、其の發展に貢獻するに必要なる豫備知識を得んが爲めであつた。此理想の生涯に入らずして病魔の毒手に倒れたる君及び君の近親諸君の遺憾は想像に餘りあるが、然し義兄花岡氏の溢るゝ計りなる濃き情愛の結晶たる二冊の好著を通じて高潔なる君の性行、痛快なる君の雄圖、有益なる君の研究は一般世人を感動、刺戟、裨益せんとして居るではないか。君亦以て冥す可きであること云はざるを得ない。